

真・恋姫†無双 魏在住
の死神代行

ぐぎゆる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

外史に死神代行が訪れ、平和な大陸統一を目指すほのぼのストーリー（嘘）

BLEACHと恋姫のクロスものです

文才ゼロ、適当感満載ストーリーなので、苦手な方はスルーを。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
33	27	15	6	1

第1話

尸魂界。

瀨靈廷にある六番隊隊舎に四人の死神がいた。

六番隊隊長、朽木白哉。

六番隊副隊長、阿散井恋次。

十三番隊副隊長、朽木ルキア。

死神代行、黒崎一護。

ユーハバツハ率いる「ヴァンデンライヒ見えざる帝国」を撃破して二年。

多くの被害を出しながらも尸魂界は復興を果たしていた。

かく言う一護も、死神代行を続けながら大学に通っている。目指すのは――医師。

現在は家族から離れ一人で暮らしている。そんな中でも尸魂界からの救援要請（主に空座町の担当死神である車谷善之助から）には応えている。

この日はルキアからの救援要請を受け、尸魂界での虚を討伐。その報告を行っていた。

「つーか、アレ本当に俺必要だったのか☒
だろ」

どー考えてもルキアだけで対処出来た

「う、煩い!!? 私だつて見誤る事もある…」

「いや、もう副隊長なんだから、そーいうのはマズいだろ…」

「まあイイじゃねーか。一護もいいストレス発散になっただろ」

「いや、虚退治つてそーいうんじゃ…」

「ともかく」

一護たち三人の言葉を遮り、白哉が口を開く。一瞬、視線を机の上にある一枚の紙に落とし、すぐに三人を見る。

「懸案の虚が討伐されたのであれば、何の問題も無い」

「イイのかよ、それで…」

「問題無い」

呆れる一護の言葉に、白哉は小さく頷いた。



白哉への報告を終えた三人は、瀨霊廷に寄り道ーする事無く穿界門にいた。

「テメエ、ちったあ寄り道してもいいだろーが」

「そうだぞ、一護」

「悪い、大学の単位がちよつとヤベーんだ。最近、イモ山さんからの呼び出しが多くてな……」

「イモ山：☒ ああ、車谷殿の事か。まあ、臨時の担当だ。近い内に新しい担当死神が来るはずだから、それまでの辛抱だ」

「ま、いざとなりや浦原さんや石田、茶渡に井上もいるからな。何とかなるだろ」

「アイツらだつて、予定あんだろ……。ま、何とかするさ」

一護はルキア、恋次と別れ扉が開いた穿界門へと飛び込んで行った。

扉が閉まり、薄暗くなった断界を一護は走り始める。

死神代行として、初めて断界に来た時は戸惑ったが、既に慣れたものだ。拘突がない断界を進んでいると、一護の目になわつた光景が映る。

一護が進む道の先に白装束の男が立っていた。体つきはやや貧弱、顔はフードで隠れてよく見えず、口元しか見えない。

その手には八角形の銅鏡がある。訝しげに見る一護を見て、口元に笑みを浮かべて白装束の男が口を開いた。

「……死神代行黒崎一護ですね」

「……お前、何モンだ☒」

「私はしがらない道士です。今回、貴方をお願いしたい事がありました…」
物腰柔らかい言葉に、一護は目を細める。

目の前の男から、霊圧は全く感じない。そんな奴が断界に入り込んでいる時点で怪しさ満点だ。

「悪いが、この後の予定が詰まってるんだ。他当たってくれ」

「そうおっしゃると思ってたのでー」

男はそう言つて銅鏡を一護に向け。

「無理にでも来ていただきます」

拳で銅鏡の鏡を割った。

(何だ…鏡を割って何がしてえんだ?)

何かを呼び出すのか、それとも既に何かが起きているのか。

嫌な予感を感じながら、斬月に手をかけると割れた鏡から強烈な光が溢れた。

「なっ…何だ…」

「では、吉報を待っていますよ」

「まっ、待て!!？」

眩しすぎる光の中、男の背中に手を伸ばしながら一護は光に飲み込まれた。



澗靈廷内・技術開発局

「断界内の黒崎さんの霊圧が消えました!!?」

「穿界門を抜けたんじゃないのか☒」

「断界の途中です」

「おや、面白い事になっているじゃないか」

技術開発局の面々が一斉に振り向く。そこには面倒くさそうな表情で立つ十二番隊副隊長、阿近と玩具を見つけた子供のように目を輝かせる十二番隊隊長、涅マユリが立っていた。

第2話

外史へ（一護視点）

白装束の男の持つ銅鏡の光に飲み込まれてしばらく経ち、光が収まったのを感じ目を開いた。

「…なん、だ…ここは」

目に入ったのは、断界ではなくだだっ広い荒野だった。

尸魂界の瀨霊廷の外に似たような場所はあちらこちらにあるが、まさかあそこまでやって尸魂界のどこかやってことはないはずだ。

「つたく、何だっつてんだ…」

情報を整理しようと思ってもその情報が少なすぎる。

俺をここに連れてきた奴は道士で霊圧が全く無い、多分人間。

道士つてのが何か分かんねーが、マンガとかで見た道士と同じなら、何かしら妖しい

術でここに連れてこられたという事になる。

「…まだ狐に化かされた方が現実味があるぞ」

俺は深いため息を呆れながら吐いた。

何をしようにもどこに行こうにも、目的が定まらない。

とはいえ、ボーッと突っ立って時間を潰すのも解決にならない。

「しよーがねえ。テキトーに行くしかねーか…」

「お、兄ちゃん。良い得物持つてんじゃねーか」

とりあえずの指針（つても目的地は無い）を決めたところで、声を掛けられた。

ラッキーと思つて振り向くと、そこに居たのは頭に黄色い布を巻いた男三人。

その全員が俺を見てニヤニヤしていた。

「得物つてーあれっ☒」

そこで、俺は斬月が今の二刀ではなく昔の一刀の斬月になつてゐる事に気付いた。

鞘も柄も鏝もハバキも無い、昔の斬月の始解状態。その斬月が俺の背中にあつた。

三人の中のオツサンの斬月の評価はとりあえず横に置いて、俺はオツサンに質問を飛

ばした。

「スンマセン、ここつてどこか教えてもらつてイイツスカ☒」

この質問に、三人はお互いに見合つてボソボソと話し合いを始めてしまった。

ただ、ここがどこか知りたかっただけなんだが。呆れながら眺めていると、話し合いが終わったのか、真ん中のオツサンが。

「その大剣を寄越しな。そしたら教えてやるよ、兄ちゃん」

こんなアホな提案を寄越してきやがった。

「何言ってるんすか。何でそんな事で斬月渡さなきゃなんないんすか」

「はあ☒ タダで教えるわけねーだろ。ほれ、さっさと寄越しな」

まあ、言ってる事に間違いは無い。

ただ、オツサンの基準が普通とかけ離れ過ぎている。対価も釣り合ってるし、わざわざそこまでして教えてもらう義理も無い。

「…じゃイイっすわ。スンマセンした」

内心でため息を吐きながら反転、歩き出すがその行く先をオツサンの連れのチビとデブが塞ぐ。

そして、退路を塞ぐようにオツサンが俺の背後に立つ。

「…何の真似だ☒」

「分かってんだろ☒」

ニヤつくオツサン。

どうやら、目的は斬月らしい。少なくとも、視線が斬月を捉えている。

一応、三人の靈圧を探るが思った通り靈圧を「全く」感じない。

靈圧に絶大な差が出ると弱い方が強い方の靈圧を全く感じ取れなくなる、らしい。

実際、最後の月牙天衝を会得した俺と対峙した藍染惣右介が靈圧を感じ取れず、靈圧を棄てたと勘違いしたほどだ。

それに一定以上の靈力が無い場合も靈圧が感じ取れない。

目の前の三人が別次元の強さを持つてる、とは思えないので多分、後者の方だろう。

前者なら、斬月は要らない筈だ。

「やるってんなら、容赦はしねーぜ」

俺は斬月に手を掛けず自然体でチビとデブに向き合う。それと同時にオツサンの氣配に氣を配る。

三人の強さはおそらく合わせても俺より下だ。だが、氣は緩めない。

ここは未知の場所。何があるか分からない。

三人が劍を抜いたところで。

「くげ」

俺はデブの鳩尾に掌底を叩き込んだ。

「ふふおおっ」

「デブッ」

名前で呼んでやれよ、と思いつつチビの背後に回り首に手刀の一撃を見舞う。

マンガとか時代劇でよくやってるが、チビが意識を失うのを見て案外上手くいくもんだなと思った。

「デメエエツ!!？」

二人の惨状を見てなお向かってくるのは、勇敢なのか無謀なのか、はたまたタダの馬鹿なのか。

向かってくるオッサンに正対し、オッサンが振り下ろす剣を俺は受け止めた。

「っ……あ……」

「悪いな、オッサンの剣じゃ、俺を斬るのは——無理だ」

そう言つて、俺はオッサンの剣を片手で折った。



俺は、未だ最初の場所から大きく移動していない。

斬月を欲しがったオッサンは剣を折られて戦意を無くしたのか逃げ出した。

驚いたのは、手加減したとはいえデブがすぐに復活し意識が無いチビを抱えてオッサンの後を追つていった。

足は遅いが、何となく後ろ姿で二番隊の副隊長の大前田稀千代を思い出してしまった。

そこまではいい。まあ、ちよつと絡まれたりしたがようやく移動出来ると思つたからだ。

しかし、だ。

「いやはや、得物を使わずに賊を追い払うとは。良い腕をお持ちだ」

ちよつと絡まれるスパンが短すぎやしないか。しかもまた三人組。

違う点は、さつきは男。今は女、それだけだ。

その中の水色髪の女が上機嫌な様子で俺に声を掛けてきた。その片手には二股の槍。どうやら、戦える人間らしい。一応三人とも調べたが霊圧はやつぱり感じられなかった。

その水色髪の女の後ろには二人の女。眼鏡を掛けた黒髪の女と淡い金髪の女。

眼鏡を掛けた黒髪の女は、カツチリしてそうでどことなく八番隊副隊長の伊勢さんに雰囲気が似ている。

淡い金髪の女は、見た感じお子様だ。のんびりしてそうで、ペロペロキャンディを持ち頭に変な人形を乗せている。まさか、不思議ちゃんなのだろうか。

水色髪の女は艶やかなミニスカ着物を下品にならないレベルで着崩している。この人は雰囲気が十番隊副隊長の乱菊さんに似ている。何となく、酒も好きそうだし。

「で、アンタらも俺に何か用か」

「これといつて特に無いな。純粹にお主の戦う様を見ていただけだ」

「別に私たち二人は興味ありませんでしたが」

「私はそーでもないですよー。体の使い方とかは星ちゃん並みに上手でしたしねー」

「…まあ、確かに」

「用が無いのなら、俺は行くぜ」

時間は無限じゃない。

見知らぬ場所で野宿とか勘弁被りたい。しかし、向こうはそんな事御構い無しのように。
で。

「まあ、待ちなされ。そんなみすぼらしい姿でフラついてると、また襲われてしまうぞ」

「…何でだよ。武器しか持ってねーんだから、襲う奴なんかいねーだろ」

「いや、お主のその大剣…類稀なる業物とお見受けした。お主の実力を知らぬ者はそれはもう蠅のように群がるであろうな」

「…何が言いてえんだ？」

「うむ。しばらく我らと共にー」

「星ちゃん。時間切れです」

金髪の少女が、一点を見つめながら水色髪の女に言う。

よく見てみると、何やら鎧っぽいのを着込んだ集団がこっちに向かっていった。しか

も、かなり多い。

先頭の馬に乗った奴が持つ旗には「曹」の一文字。

「…ちつ、官軍か。何とも頃合いの悪い…」

「急ぎませう。今官軍と関わるのよろしくありませんし」

「ではではー、またお会いしましょう。お兄さん」

そう言つて三人ともが脱兎の如く俺の前から走り去つていった。

「…何なんだよ、一体!!？」

そろそろ、ストレスがMAXになりそうだ。



☒州、陳留郡。

現在この陳留を治めるのは、曹孟徳。分かりやすく言えば、魏の曹操だ。

正直、三国志なんて其処まで興味が無かった。だから、知つてるのは有名な武将の名前とかかなり大雑把な話の流れぐらいだ。

はつきり言つて曹操が陳留を治めていたかどうかすら分からない。

だが、それでも確実に分かる事は一つあった。

曹操は男ーという事。

しかし。

「それでは、取り調べを始めましょうか」
目の前にいた曹操は、女だった。

第3話

怪しい男（曹操視点）

天高く、澄み切った青空が広がるこの日、一つの事件が起きた。

私が管理している書蔵庫から、太平要術の書が盗まれた。

太平要術の書——それは、所有者が持つ望みを叶える書と言われ、太平要術の書に書かれている通りにすればどのような望みも叶う。

ただ、所有者の望みによって書の内容も変わる。故に、危険な思想を持つ者に渡れば非常に厄介な事になる。例えば、私のような。

実際、私も読んだ。が、私はすぐに書を閉じ書蔵庫の奥にしまいこんだ。

私は私の望む事に他人の意図が入り込む事が許せない。

私が望む事は多くの人手がいるし、助けもいる。しかし、それでも私の望みは艱難を極めるだろう。

もし、太平要術の書を用いれば容易に望みを叶える事が出来るかもしれない。だが、

それは私の矜持を捨て去る事と同義なのだ。

自らの手で追い求め、自らの手で掴みとる。

例え艱難が立ち塞がるうと、それを打ち破った先にこそ、私が渴望する望みがあるのだ。

それはさておき、太平要術の書を盗んだ犯人は三人組の男である。壮年の男に太った男に背の低い男。

共に黄色い布を頭に巻き揃いの服を着ている。

報告には陳留郡内、または隣郡の盜賊団の一味の可能性を示唆する一文があり、私の見解も大凡同一であった。

「これより、我が城内に於いて盗みを働いた一味の捜索に入る!!?」

「[[[[はっ!!?]]]]」

騎乗した兵が次々と出発する中、ふと空を流れる一筋の光を見つけた。

「…流れ星…☒」

それは刹那の瞬きであったが、私の目にはしっかりと焼き付いていた。

漆黒の流れ星。

周りを赤く縁取られたそれは、まさに凶兆をそのまま形にしたようだった。

「華琳様、如何なされました☒」

「…いえ、何でもないわ。行きましょう」

「はっ」

部下の言葉に短く応え、私は馬の腹を軽く蹴った。



搜索隊は数にして十ほどある。一部隊に三十名。それが十で三百―とはいかなかった。

私の側近の部下が「華琳様の部隊が三十人では示しがつきません!!？」と言ってきた。因みに、華琳とは私の真名だ。

勿論、周りに合わせようと言う意見もあったのだが、その部下が即却下。更には周りを威嚇し始めたので、宥める為にその部下の進言を採用した。

私自身、下らない事で時間を取りたくないという思いもあったのだが、勿論口には出さない。

ということもあり、多方向に向かった部隊の中で私が率いる部隊だけが百名と大所帯となってしまった。

「申し訳ありません、華琳様。姉者が無理を言い…」

「構わないわ。春蘭も心配してくれているのでしよう。まあ、あの周りを威嚇する癖はどうにかならないかと、毎回おもうのだけれどもね」

「華琳様も意地が悪い。姉者のそういうところも理解して傍に置いておられるのでは
☒」

私は応えず、ただ笑みを見せた。そしてその笑みを見た彼女も私の思いを理解して笑み
みを浮かべる。

私の部下として真っ先に上がる名前がある。夏侯惇と夏侯淵である。

二人は姉妹で、私の部隊を三十名から百名にと進言したのが姉の夏侯惇。そして、今
話していたのが妹の夏侯淵。

姉の真名は春蘭、妹の真名は秋蘭。私が幼い頃から付き従ってくれているかけがえの
無い存在である。

「華琳様ー!!?」

遠くから、私の名を呼ぶ元気な声が聞こえてくる。行軍を行っている部隊の先頭から
馬に乗ってくるのは、件の春蘭であった。

「どうしたの、春蘭」

「部隊の前方に怪しい男を一人発見致しました!!?」

「怪しい…か。その男の身形は☒」

「はっ、先行して確認した兵によれば、頭髮は橙、全身黒のボロ着を着ており背には片刃
の大剣を背負っているとの事です」

春蘭の言う通り、かなり怪しい。

街道を行かずにこのような荒地にいるのは、何かしら目的があり歩いているのだろう。

だが、ただ怪しいだけ。報告を受けた盗賊一味の身形とはかなりズレている。

しかし、ボロ着で武装しているとすると仕事にあぶれた盗賊という可能性もある。

この可能性があるならば、見逃すわけにはいかない。

盗賊は、国を亡ぼす悪害なのだから。

「華琳様、捕らえますか」

「まずは話を聞きたい。すぐにその男のもとに案内しなさい」

「はっ!!?」



「一体何なんだよ、ゾロゾロと」

件の男が苛ついた様子で言葉を発する。髪は橙、黒のボロ着に片刃の大剣。報告に間違いは無い。付け加えるなら…態度が不遜な事ぐらいか。

男はその鋭い眼で兵たちを見渡し、春蘭、秋蘭、そして最後に私を見る。

訝しげに私を見てから、男が口を開いた。

「…ま、いいか。ワリーけど、此処が何処か教えてくれねーかな」

不遜、というよりもガラの悪い感じの口調に私は無意識に眦を吊り上げ、咄嗟に眦を下げる。

見ず知らずの男の言葉遣いにいちいち感情を顕にするようでは、為政者は務まらないのだ。

「貴様、華琳様に対して無礼だぞ!!?」

勿論、民に対して舐められないように威厳を保つのも大事である。ただ、春蘭のように辺り構わず噛み付くのは止めて欲しい。

「姉者、気持ちには分かるが少し静かにしている。華琳様が話せない」

「む、そうか。失礼しました、華琳様!!?」

大体は、このように秋蘭が春蘭を宥めてくれる。ただ、あまりに酷い相手だと秋蘭まで抑えが利かなくなるので、その際は二人に裁量を任せている。

そう、任せているのであって私が面倒を避けているわけではない。

「此処は^{えんしゅう}州の陳留郡よ。貴方、このような場所で何をしているのかしら[□]」

問題はここだ。

こんな人もまず来ない荒野のど真ん中で、一体何をしているのか。

もし、太平要術の書を盗んだ輩と仲間であるならば此処で落ち合う予定なのは、と考える事が出来る。

「そうであるならば、男を拘束し仲間の名前から詳細な情報を引き出す手筈になっている。」

「変な男に連れてこられたんだよ。つたく、何なんだよ一体……」

「貴方の事情は後で聞いわ。まずは此方の質問に答えて欲しい。この辺りで頭に黄色い布を巻いた三人組を見なかったか？」

「……三人組」 ああ、頭に黄色い布を巻いた男だったら襲ってきたから追っ払った」

「……それで、どちらに逃げたか分かる？」

「あつちだ」

男が指を指す。その方角に向かうなら三人組は陳留郡を出て東郡に逃げた事になる。

少々面倒だが、元々他の郡に向かう予定だったので丁度良かった。

「……部隊を分けましょう。半数は私と共に陳留に帰還、残りはこの辺りを搜索せよ!!？」

「「「はっ!!？」」」」

「貴方も来てもらおうわよ」

私の言葉に、男は小さいため息を吐いて頷いた。



一護が断界から消えた数時間後。

瀨靈廷、十二番隊管轄の技術開発局。主に涅マユリが使う部屋に数人の死神が集まっ

ていた。

「…で、此処で話をするのって…何が意味あるの☒」

「知らんヨ。その元死神にでも聞きたまえ」

集められた死神はー。

一番隊隊長にして護廷十三隊総隊長である京楽春水。

一番隊副隊長兼八番隊副隊長、伊勢七緒。

十二番隊隊長兼技術開発局局長、涅マユリ。

六番隊副隊長、阿散井恋次。

十三番隊副隊長、朽木ルキア。

そして、招集をかけたのは元十二番隊隊長にして初代技術開発局局長の浦原喜助である。

「どーも、皆サンわざわざおこしいただいてスミマセン」

「…浦原喜助。此処は私の部屋なんだがネ」

「まーまー堅い事言わずに。…さて、では始めさせてもらいますね」

浦原の言葉と同時にモニターに断界の映像が映される。

「此処に来てもらったのは、これを見てもらうためです」

浦原が映像を進める。変化の無い断界の映像だが、しばらくすると変化が現れる。

「……ここです」

「…一護、だな」

「ああ。しかし、立ち止まって何をしているのだ☒」

「…んー、誰かと話してるみたいだねえ」

「ですが、この日穿界門を利用してゐるのは黒崎さんだけと聞きましたが」

映像を見ながら会話を交わす四人だが、マユリと浦原は会話には入らない。

二人の興味はこの映像の先にあつた。

少しの会話の後に一護が動くか、という刹那の間にモニターを光が埋め尽くす。そして、光が収まった断界に一護の姿は既に無かつた。

「…これが、私が皆サンに見せたかつたものです。たまたま断界の様子を見ていた局員が様子を確認、すぐに黒崎サンの霊圧探査を行いました。戸魂界、断界、現世に置いて反応はありませんでした」

「浦原、一護が何者かにやられたということか☒」

「いえ、それは無いと思います。純粋な戦闘力で言えば隊長クラスか、それを上回りますから」

「じゃあ、何かしら搦め手を使われたつてのはどうか☒」

「可能性としては、ゼロではありません。しかしー」

「技術開発局から詳しい原因は不明、との報告が上がっています」

七緒の言葉に、浦原とマユリを除いた全員が深く考え込む。

技術開発局で何も出なければ、実際何も無いというのが一般の考え方である。

浦原やマユリというマッドだが超優秀な技術屋がトップに立つ組織でも原因不明となると、優秀な死神では及びもつかない所に答えがあるのが普通である。しかし――。

「その調査に涅サンは☒」

「不参加、となってます」

「なら、今度はワタシと涅サンで調査してみましようか」

「分かりました、では――」

「巫山戯るな!!?」

七緒が了承の旨を示そうとした時、マユリが珍しく「――というより久しぶりに声を荒げた。

「私が!!?」 浦原喜助と!!?

共に調査☒

ありえないネ!!?」

「し、しかし涅隊長。仮にも一護が行方不明になっているので…」

「そんな事知った事では無い!!?」

私は忙しいんだ!!?」

ルキアの言葉にも「忙しい」言って口を利かない。浦原は「相変わらずツスねえ」と笑うだけ。

マユリが浦原を毛嫌いしているのは、周知の事実である。万が一にもマユリと浦原を同列視しようものなら、マユリによるキツイ制裁が待っているのだ。

浦原はそれを知った上でからかったりするのだが。

「忙しいのなら…仕方ないツスねえ。ただ、私の方でも必ず原因を見つけるとは言えません。技術開発局でも無理となるとー」

「待ちたまえ」

消極的な浦原の言葉に、マユリが反応した。

「技術開発局の名を貶める発言は慎みたまえ」

「おや、そんなつもりは無いンスけどねえ。なら、ワタシと涅サン別々に調査しましょうか。涅サンがワタシより先に原因を見つければ、技術開発局の名も上がると思いますよ」

「…フン、ならば喜んで貴様に吠え面をかかせるとするヨ」

そう言つて部屋を出て行くマユリの後ろで、浦原は皆に向けてサムズアップ。皆を呆れさせた。

「浦原、良いのかあれで」

「いいンスよ。これで、原因を見つける確率は上がりましたからね」

「そうか…」

「じゃ、浦原くん…後は頼んだよ」

「分かりました」

去っていく春水の背中を見ながら、浦原は笑みを浮かべて春水を了承の言葉で見送った。

第4話

天の御使い（一護視点）

「それでは、取り調べを始めましょうか」

目の前の金髪ツインドリルの少女の小さい口からは似つかわしく無い単語が飛び出す。

自己紹介をする事も無くされる事も無くズルズルと流れて街まで連れて来られた。

断ろうか、とも考えたが隣の黒髪デコッパチが突き刺すような視線で睨んでくるので、余計なイザコザを避ける為に断る事を止めた。

場所に関しては、州の陳留郡と答えを貰ってるので、とりあえず尸魂界では無い事は何となく分かった。

つーか、この金髪ツインドリルがかなり偉そうなんだが。

「では、貴方の名を聞かせて貰いましょうか」

「…黒崎一護だ」

「…随分変わった名ね」

「ほっといてくれ。つか、人に名乗らせといてアンタは名乗らないのかよ」

「貴様、華琳様に何という口の利き方…!!?」

「構わないわ、春蘭」

「は、はあ…」

「どうやら、黒髪デコッパチは金髪ツインドリルの部下のようだ。多分、横の明るめの水色髪の女も部下なんだろう。黒髪デコッパチを「姉者」と呼んでたしな。」

「構図がちよつと十番隊に似ている。まあ…十番隊に黒髪デコッパチのように喧嘩っ早い奴はいなかったが。」

「我が名は曹孟徳。陳留を治める刺史よ」

名前を聞いても、イマイチピンとこない。聞いた事はあるんだが思い出せないし、さつき部下に「かりん」と呼ばれてたのは何なんだ？

曹孟徳…曹孟徳か…あ。

「アンタ、曹操か!!?」

俺が叫んだ瞬間、黒髪デコッパチが俺に向かって大剣を振り下ろしていた。

剣速は、かなり早い。が、躲せない程でも無いんだが、瞬步つて使えるのかと考えたら、自然にその大剣を白刃取りしていた。

「おまつ!!?」 アブねーな!!?」

「先程から華琳様に対する無礼の数々、もう我慢ならん!!?」

「落ち着け姉者。ここでこの男を殺しても華琳様の為にならん」

「……秋蘭がそう言うなら」

劍を引く理由に少し納得がいかないが、とりあえず助かったようだ。

つか、何で姉が妹のいいなりになつてんだよ。

「それにしても、春蘭の劍を止めるなんてなかなかやるじゃない、貴方」

「あ☒ んな大したことしてねーよ。俺の知り合いなら何人か出来んじやねーかな」

「…そう。それで、貴方の出身は☒」

「空座町だ」

「聞き覚えが無いわね。二人はどうかしら☒」

「いえ、私も聞き覚えは…」

「姉者と同じく」

まあ、あの金髪ツインドリルが曹操ならば空座町を知ってるはずは無い。

三国志は確か大昔の実話、だったかどうか。そこらへんの知識は高校生だった頃から比べでも抜け落ちている。

多分、名前を聞いたら思い出す程度のレベルだ。

「つーか、俺の素性とか関係ねえだろ」

「…まあ、いいわ。ところで貴方、私の名を知っていたわね☒
にも関わらず」
それも名乗って無い

その時、俺はマズったと思った。

確かにあの時曹操は自分の事を曹孟徳と名乗った。曹は姓、孟徳は字にあたる。俺が口にした「曹操」には曹操が口にしていない名にあたる操が含まれていた。

見知らぬ人間にいきなり伝えてない名を言われたら、誰でも疑問を持つ。
何で自分の名前を知っているのか、と。

「キチンと説明して貰えるわよね☒」

にこり、と笑みの曹操。ただ、その目はあんまり笑ってなかった気がする。

「…メチャクチャな話になるけど、俺は多分未来から来た」

「…は☒」

「だから、未来から来たんだよ。多分…1900年くらい遡って」

「バカな、あり得ん」

黒髪デコッパチの言う通り、普通ならあり得ない現象だ。俺だって言ってる馬鹿馬鹿しいと感じるんだ。

でも、事実俺はここにいます。馬鹿馬鹿しかろうと荒唐無稽であろうと、今はこの説を信じるほか無い。

これで浦原商店あげてのドッキリとかだつたら、あの下駄帽子をボコつたる。

「…つまり、貴方は自分を天の御使いと言いたいのかしら」

「…天、の……はい」

「…知らないの」

「知らねーよ。何だよ天の御使いって」

「…秋蘭」

「はっ。…天の御使いとは、占い師の管輅がこの大陸に降りてくると予言した存在だ。

その者は白き衣を纏い、大陸を安寧に導くとされている」

「…何だそりゃ。」

「…つか、俺にそんな力ねーし。死神としての戦闘能力はあるが、多分違うだろ。死覇装も黒だし。」

「ま、天の御使いがどんな奴かは分かった。けど、俺は違うだろーな」

「…分かったわ。で、貴方が見た盗賊一味の件なのだけれど」

「何だよ」

「その盗賊一味が盗んだ書を取り戻すまで、協力して貰うわよ」

…また、面倒事が転がり込んできやがった。

第5話

協力者（一護視点）

俺は城壁の上から忙しく動き回る多くの兵を眺めていた。

結局、俺は華琳——曹操に協力する事にした。実際に盗賊を見ているのは俺を入れても少ない。僅かな手掛かりを逃したくない華琳の思惑に乗った形だ。

因みに、その時に真名について聞いて更に曹操の真名を呼ぶ事を許された。

理由としては俺の名前に真名がなく、真名にあたる「一護」を俺が名乗っていたから、
だと言う。

確かに、真名にあたるのは黒崎よりも一護だろうと俺も思う。だが、それにしても真名を呼ぶ事を許すのが早くないか、と言ったら。

『貴方は私が真名を名乗った者に真名を呼ぶ事を許さない、器の小さい人物に見えるのかしら』

何とも誇り高い女である。

因みに、側にいた部下二人の真名も呼ぶ事を許された。まあ、どちらかと言えば華琳の命令なのだが、拒否権は無かった。

聴取的なものが終わった後、寢床となる部屋に案内された。

ワンルームより少し広い部屋に机に椅子、ちよつとした天蓋のついたベッドと最低限の家具があり、暮らすには十分だ。

さて、華琳の下に世話になり始めて一週間経った今。

「…やる事が無い」

この世界に連れてこられた翌日、華琳から呼び出され「早速協力して貰おうかしら」と言われた。

聞けば、近い内に盗賊を討伐する為に出兵するらしい。そこで、俺が見た盗賊がいなかを確認する為について来い、という事だった。

勿論、協力すると言ったから二つ返事でOKしたのだが、準備に時間が掛かっているのか華琳に返事してから六日が経った。

「いつまでやってんだよ…」

この六日、俺は尸魂界や空座町に戻る手段やその情報が無いかを探したが全く見つからなかった。

「どうやら、俺をここに連れてきた奴に直接聞かないとダメなようだ。

「黒崎、貴様!!?」　　「こんな所で何をサボっているか!!?」

ボンヤリと考え込んでいるとうるさい怒鳴り声が聞こえてくる。

視線を横に移せば、黒髪のデコッパチー春蘭がいた。

「…何だ、春蘭かよ」

「何だとは何だ貴様」

「別に。つーか、そんな怒鳴るなよ。事実やる事が無いんだからよ」

そんな事を言うと、また怒る春蘭。

因みに、名前は夏侯惇元讓。華琳の部下の中では一番偉いーののだが。

「で、何か用かよ」

「ん×　別に何も無いが×」

「…何しに来たんだよ」

何で華琳の次に偉い奴がこんな所をウロウロしてんだよ。

つか、何で三国志の時代にサボるって言葉があるんだよ。元はフランス語のサボター

ジュなんだが…。

「にしてもよ、出兵するって聞いたのが六日前だぞ。まだなのかよ×」

「仕方無かろう、出兵にしても準備が掛かるからな」

「…そういうもんか」

「ところで、大剣を背負ってるからには、戦えるのだろう☒」

「ああ。戦闘経験もあるしな」

虚や破面、滅却師とかだけだな。

「ほう…ならばいざれ刃を交えてみたいものだな」

「また今度な。……そういや、華琳ってやっぱ強いのか☒」

前から気になっていた、華琳の強さについて聞いてみた。腕つぶし一つであの地位に就いたわけじゃ無いだろうが、あの小さな体にどれ程の強さを秘めているのか、気になったのだ。

「そうだな…力は私の方が上だが、決して非力ではない。力・技・心が高い水準にあるから、私が戦って勝てるかは分からん」

「あら、随分と珍しい組み合わせね」

春蘭が来た方からとは逆の方から秋蘭を連れ、華琳が現れた。

華琳の後ろに控える秋蘭の名前は夏侯淵妙才。春蘭の妹だ。

「二人で何を話していたんだ、姉者」

「こ奴が華琳様は強いのかと聞くからな。華琳様の強さについて語り始めていたところだ」

「そうか。ところで姉者、華琳様より仰せつかった全軍の準備報告はどうした☒」

秋蘭の問いかけに、春蘭は「あつ」と拙い事を思い出した表情になった。

…本当に華琳の次に偉いんだろうか、こいつは。

「申し訳ありません、華琳様!!?」 最後発の部隊が準備中ですが、出発に影響は無い

との事であります!!?」

「そう、了解したわ。後、これからはすぐに報告するように」

「は、はっ!!?」

「…で、一護は何故こんなところでサボっているのかしら☒」

…どうやら、サボるとい言葉は普通に使われているようだ。

「つても、やる事が無いんだからしかたねーだろ」

「その割には度々城から姿を消していたじゃない。何をしていたのかしら☒」

「ダメ元で元の世界に帰る方法を探してたんだよ。ま、ダメ元通り見つからなかったけ

どな」

「そう。…じゃ、貴方にお使いを頼もうかしら」

「お使いって…」

子供じゃねーんだから、と言いついそうになるが何とか言葉を飲み込む。

言ったらこいつは絶対からかってくる。華琳は何となく夜一さんと同じ匂いがする

のだ。

「実は糧食の最終報告書が上がってないのよ。貴方にはそれを取ってきて貰いたいの」
「…本当にお使いだな。分かったよ」

「糧食担当の監督官は厩で馬具の確認をしているはずだ」

「おう、ありがとな」

秋蘭の情報に礼を言つて俺は城壁を後にした。後ろから聞こえてきた春蘭の「走れ馬鹿者!!?」の言葉にはきつちり「うるせえ!!?」と返してやった。

厩。要は馬小屋である。

よくアニメやドキュメントで見る馬小屋なんだが。

「…デケエ、な」

勿論、三国志の時代の馬小屋だから現代の馬小屋に比べたらボロい印象がある。

だが、目の前の馬小屋はアホみたいにデカく最低でも100頭の馬が繋がれている。出兵間近ということもあり、馬よりも人間が慌ただしく、騒がしく動き回っている。

「…そーいや、監督官が誰か聞いてねえ」

名前はともかく、見た目ぐらいは聞いておくべきだった。

まあ、監督官がいるのは分かっているから、監督官の居場所を聞けばいいか。

で、周りの連中に聞いたらあつきり見つかった。見つかったんだが、監督官は小さい女の子だった。

後ろ姿しか見ていないが、背丈は華琳ぐらいしかない。髪の色はフードで分からない。

つか、この時代にフードってあったのか。しかも猫耳付き。

とりあえずフード問題を脇に追いやり、監督官（推定）に声を掛けた。

「ワリイ、ちよつと良いか☒」

声掛けとしてはまあ、マシな方だ。

オレンジの髪というのはどうにも不良っぽく見られる。今回も出来るだけ優しく言ったつもりだったのだが。

「ひっ☒　　ちよつと、いきなり後ろから声を掛けないでよ!!?」

俺も何度も怯えられた経験者なのでとりあえず声を荒げる事はなかった。

だが「ひっ☒」は無いだろう。俺はそんなに怖いだろうか☒

「わ、悪かったよ。糧食担当の監督官ってのはアンタだろ☒」

「…だったら何よ」

「華琳からのお使いで糧食の最終報告書を貰いに来たんだがー」

「あつ、あ、貴方っ!!?」

何で曹操様の真名をつ☒」

まあ、事情を知らないならこの反応もやむなしなのだろうか。

「あー、色々あつてなんか呼んでいいって許可貰った。詳しい話は華琳に聞いてくれ」

「…何でこんな得体も知れない男なんか曹操様は真名をー」

なんかブツブツ言いだした監督官（多分）。顔も青ざめている。

「おい、大丈夫か…」

「っ…煩いわね!!? つていうか、アンタ誰よ」

「今更かよ…。黒崎一護、華琳の協力者だ」

「…そういえばそんなのが居たわね。まあ、いいわ。アンタが曹操様に真名を許されたのは分かったわ。じゃ、もう曹操様の真名を呼ばないで。曹操様の真名が穢れるから」

ふんす、と鼻息荒く言い切った監督官（恐らく）はずつと俺を睨みつけていた。

色々言いたい事はあるが、とりあえず用事を済ませないと拙い。特に春蘭あたりが。

「つか、早く糧食の最終報告書渡してくれないか」 でないと俺が怒鳴られる」

そう言うのと、何故か舌打ちしながら報告書を渡してきた。

俺何かしただろうか、と内心首を傾げながらもその報告書を受け取り俺は厩を後にした。



一護が尸魂界、空座町から姿を消して一日が経った。

すでに一護失踪の件は父親の一心に伝えられ、現在一護は旅に出ているという事になつてゐる。

そして、失踪した一護を発見すべく技術開発局が動き始め、現世側も静かに動き始めていた。

「…夜一様、黒崎一護の搜索ならば技術開発局が行つておりますが☒」

「莫迦者。一つの組織で搜索するよりも複数で搜索した方が見つかりやすいじゃろう。すでに喜助も動いとするようじゃしの」

現世にある駄菓子屋「浦原商店」。その浦原商店にある隠された梯子を下りた先にある、地下空間。通称「勉強部屋」。

そこにゐるのは、二番隊隊長にして隠密機動総司令官・隠密機動第一分隊「刑軍」総括軍団長を務める碎蜂。そして碎蜂と共にゐるのは二番隊隊長の前任者の四楓院夜一である。

何故現世で二番隊隊長が一護を搜索しているのか。偏に夜一と共にいたいが為である。

「しかし、ここに黒崎一護がいますか☒」

「さあ」

「ええっ☒」

